

第1章 江戸時代における銀山町の人口動向と社会構成について

仲野義文

はじめに

本論は、江戸時代の銀山町に暮らす人々に焦点をあて、その家族構成や職業・身分などについて関連する文献史料から明らかにし、鉱山社会の特質について考えようとするものである。

鉱山社会の研究については、近年荻慎一郎氏の論考¹によって秋田院内銀山や大葛金山の実態が紹介されてきた。同氏の研究は、近世の鉱山を支配・経営・技術・労働・法という個別のテーマからアプローチし、それらの成果を踏まえて鉱山社会の特質をあきらかにしている。しかし、このような荻氏の優れた研究があるにも関わらず、個別鉱山におけるこうした視点での研究は十分になされていない。このことは石見銀山の研究においても同様であり、あらためてこの分野での研究成果が求められるところである。

このような現状を踏まえて、本論では鉱山社会をテーマとして取り上げることとした。具体的には、確実な史料によって江戸時代における銀山町の人口動向をあきらかにすること、またそれが鉱山の経営とどのように関わっているのか、という点についても考察したい。加えて、銀山町を構成する住民の家族や職業についても見ることにする。これらは基本的な問題であるが、実際にはこれまで触れられることはなかった。本論が今後の研究への布石になればと思う次第である。

第1節 銀山町における戸口の推移と鉱山経営の動向

第1項 銀山町の概要

江戸時代の銀山町は邇摩郡佐摩村に属し、その範囲は惣廻り2里半、東西35丁、南北20丁であった。「正保石見国絵図」によると、銀山町の外周には柵列が巡らされ、これを「柵之内」と称して一般の在方と区別した。また銀山への出入口には都合8ヶ所の口屋を設け銀山附地役人を配置し灰吹銀の抜け荷を監視するとともに、銀山へ来る商人から歩一運上を徴収した。

銀山町は、大谷・下河原・栃畑谷・昆布山・休谷・清水谷の「里山」と、本谷石銀の6地区からなり、これを通常「銀山六谷」と称した。銀山の最盛期には「石銀千軒」と言われるごとく仙ノ山山頂付近の石銀や南側の本谷にも多くの家屋敷があったようであるが、江戸後期には第1表に示すごとく、往還沿いの大谷・休谷・下河原の3地区に集中した。また「銀山百ヶ寺」と言われた寺院も大幅に減少したが、それでもなお文政期には26ヶ寺が存在した。

文久2年「町明細帳」によると、銀山の産物として無名異が見えるほかに、小物成として作物運上・大豆代・酒屋役・大工水役・木挽水役・石工水役・酒造御運上・獵師鉄砲役などがあり、銀銅の生産以外に農作物や加工品などの生産も若干ながら行われていたよう

である（第2表）。このことから銀山町においては鉱業以外の産業はほとんど発達しておらず、したがって就労も生活もかなりの部分で鉱山に依拠していたものといえる。当然ながら町の盛衰は鉱山経営の動向によって大きく左右されることになるが、次ぎに鉱山経営の動向と戸口の推移について見ることにする。

第1表：銀山町の屋敷分布

地区名	軒数	割合
本谷	24	7%
昆布山谷	25	7%
栃畑谷上組	29	9%
栃畑谷下組	17	5%
大谷上組	47	14%
大谷下組	34	10%
柑子谷	30	9%
休谷上組	14	4%
休谷下組	34	10%
下河原上組	44	13%
下河原下組	38	11%
合計	336	

出典：嘉永4年「石見国遼摩郡銀山町五人組改帳」高橋家文書

第2表：銀山町の小物成

項目	運上額(匁)	備考
作物運上	809.885	銀山麓内小畑・山林
大豆代	14.625	山吹城下屋敷畑
銀吹床役	92.16	銀吹師3人
酒造御運上	76.8	高橋富三郎
酒室役	18.75	高橋富三郎
大工水役	45	吉助外8人
木挽水役	10	丈兵衛・国吉
石工水役	5	治平
猟師鉄砲役	6.4	三之助
合計	1078.62	

出典：文久2年「石州遼摩郡銀山町明細帳 控」

第2項 産銀量の推移と銀山町の戸口

江戸時代の銀山では慶長元和期に最盛期を迎えた後産銀は急激に減少し、中期以降にあってはめまぐるしく盛衰を繰り返しながら幕末に至っている（第3表）。かかる鉱山経営の動向はまた銀山町の戸口にあっても同様で、例えばこのことについて具体的に見ると第4表のとおりである。これによると、銀山町の戸口はおよそ鉱山の盛衰に伴って増減していることがわかるが、とりわけ

元文から延享期にかけては大きな画期があったことが見て取れる。元文5年から延享までの7年間では家数430軒、人口290人もの大幅な減少に及んでいる。産銀量もまたこの時期著しく減少しており、この間の戸口の減少が鉱山経営の不振にあったことが指摘できるのである。

ところで、元文期以降の鉱山経営の不振には、鉱脈の零細化や地下水の湧き出しによる生産コストの上昇などがその背景にあったが、いまひとつにはこの時期行われた幕府の貨幣改鑄にもその理由が求められる。

第4表：銀山町の人口推移

年代	家数	人別		
		総計	男	女
延宝6(1678)年	317	1564	853	711
元禄5(1692)年	350	1871	1004	867
元文5(1740)年	477	1467	-	-
延享4(1747)年	341	1173	-	-
文化12(1815)年	461	1657	-	-
天保9(1838)年	400	1242	627	615
文久2(1862)年	381	1061	523	538

出典：「覚書」野沢家文書／元禄6年「石雲隠覚集」阿部家旧蔵文書／「銀山覚書」龍善徳氏所蔵文書／延享4年「銀山覚書」龍善徳氏所蔵文書／「石見国銀山要集」山中家文書／天保9年「私領御巡見様御案内帳」島根県立図書館／文久2年「銀山町明細帳」高橋家文書

第3表：産銀量の推移

年号	産銀高(貫)						
延宝1	357.025	享保12	284.542	天明2	102.010	天保8	67.000
延宝2	285.300	享保13	152.356	天明3	156.550	天保9	55.000
延宝3	398.400	享保14	127.600	天明4	196.950	天保10	52.000
延宝4	297.058	享保15	130.959	天明5	136.350	天保11	50.000
延宝5	279.680	享保16	100.150	天明6	200.000	天保12	52.000
延宝6	198.857	享保17	131.323	天明7	121.200	天保13	50.000
延宝7	179.630	享保18	234.825	天明8	90.900	天保14	45.000
延宝8	251.726	享保19	199.580	寛政1	101.000	弘化1	30.000
天和1	170.334	享保20	138.370	寛政2	64.135	弘化2	37.000
天和2	200.140	元文1	130.593	寛政3	60.600	弘化3	38.077
天和3	295.671	元文2	113.322	寛政4	101.000	弘化4	31.210
貞享1	356.239	元文3	155.338	寛政5	121.200	嘉永1	40.400
貞享2	376.470	元文4	107.060	寛政6	122.210	嘉永2	42.016
貞享3	290.301	元文5	76.518	寛政7	112.110	嘉永3	40.097
貞享4	410.258	寛保1	73.730	寛政8	122.210	嘉永4	45.450
元禄1	431.311	寛保2	49.187	寛政9	202.000	嘉永5	50.500
元禄2	503.745	寛保3	61.408	寛政10	141.400	嘉永6	45.652
元禄3	612.840	延享1	70.700	寛政11	111.100	安政1	40.501
元禄4	625.705	延享2	101.165	寛政12	110.009	安政2	30.047
元禄5	271.141	延享3	115.140	享和1	90.001	安政3	30.300
元禄6	282.773	延享4	60.600	享和2	120.190	安政4	30.300
元禄7	310.043	寛延1	67.670	享和3	90.011	安政5	28.078
元禄8	386.299	寛延2	69.690	文化1	90.092	安政6	28.078
元禄9	363.708	寛延3	60.600	文化2	121.200	万延1	30.098
元禄10	297.783	宝暦1	52.520	文化3	150.086	文久1	33.229
元禄11	277.444	宝暦2	69.190	文化4	150.187	文久2	30.300
元禄12	238.760	宝暦3	63.630	文化5	171.700	文久3	28.078
元禄13	373.700	宝暦4	90.900	文化6	115.039	元治1	22.725
元禄14	419.466	宝暦5	101.000	文化7	133.522		
元禄15	264.317	宝暦6	101.000	文化8	100.020		
元禄16	338.653	宝暦7	80.800	文化9	80.800		
宝永1	321.772	宝暦8	62.620	文化10	80.903		
宝永2	273.187	宝暦9	65.650	文化11	230.280		
宝永3	303.409	宝暦10	50.500	文化12	190.082		
宝永4	342.241	宝暦11	60.600	文化13	191.900		
宝永5	340.370	宝暦12	64.640	文化14	180.083		
宝永6	216.140	宝暦13	100.495	文政1	146.450		
宝永7	250.500	明和1	66.155	文政2	156.550		
正徳1	246.674	明和2	101.000	文政3	101.000		
正徳2	111.100	明和3	121.200	文政4	101.000		
正徳3	69.414	明和4	121.200	文政5	101.000		
正徳4	190.721	明和5	118.327	文政6	90.900		
正徳5	80.000	明和6	70.000	文政7	70.700		
享保1	177.731	明和7	186.850	文政8	90.900		
享保2	115.933	明和8	131.300	文政9	90.900		
享保3	107.161	安永1	132.310	文政10	60.600		
享保4	140.066	安永2	132.310	文政11	60.095		
享保5	144.938	安永3	132.805	文政12	58.075		
享保6	192.845	安永4	85.850	天保1	80.800		
享保7	262.675	安永5	101.000	天保2	90.920		
享保8	126.797	安永6	101.000	天保3	96.000		
享保9	121.107	安永7	101.303	天保4	70.700		
享保10	106.476	安永8	121.200	天保5	75.000		
享保11	534.076	安永9	101.000	天保6	70.000		
		天明1	120.010	天保7	65.000		

出典：「石州銀山支配
御代官年代記並諸口
屋歩一諸運上出灰吹
銀年々納高」石見銀山
資料館所蔵

元文元年5月、幕府は新たな金・銀貨の発行を触れ出した。この金銀貨はそれ以前の享保金・銀貨に比べ金では55.7%、銀では57.5%も品位が劣るものであった。しかし通用にあたっては享保金・銀貨と同価を原則としたため、この悪貨に対してたちまち銭高となり、その結果諸色の高騰を招来することとなった。この間の銭相場をみると、改鋳前の4月では銀1匁に対し銭73文位であったが、改鋳後の6月には約65文となっており、改鋳直後から銀安銭高状態になっていたことが知られる²。また米価では元文2年には1石45匁5分であったが、同3年には87匁8分に高騰しており、貨幣改悪による影響

は徐々に現れていったようである³。このことはまた銀山町にあっても同様で、

当銀山之儀近年不盛、其上文字銀御吹改二付、灰吹丁銀引替増歩合も被仰付候得共、錢
其外諸色高直二而、銀山師仕当二合不申段々困窮、別而当春中より及飢候躰、至極差詰
り候ものとも多分出候⁴

とあり、元文の貨幣改鑄による錢や諸物価の高騰が、鉱山経営を圧迫しその結果「及飢候躰」の者まで現れるようになっていたことがわかる。代官所ではこの事態に対し、元文4年8月、窮民救済のため銀山大森両町の者107名より救米として22石3斗6升を差し出させ、同月28日より銀山の山神社において粥を支給するなどの救済策を講じた⁵。第5表はこの時の粥の支給状況を整理したものであるが、飢人は日を追って増加し11月に至っては実に470名に粥が配られている。その深刻さが察せられるであろう。

第5表：粥米の支給状況

期 間	飢人	粥米(石)
8月28日～ 9月17日(20日分)	39	0.78
9月18日～10月 2日(15日分)	90	1.35
10月 3日～10月18日(16日分)	210	3.36
10月18日～11月 4日(16日分)	320	5.12
11月 5日～11月29日(25日分)	470	11.75
合 計	1129	22.36

出典：「銀山覚書」龍善徳氏所蔵文書

明和期以降になると、鉱山開発への代官所の積極的な投資が進められ、その結果産銀量も100貫を回復し文化期には再び戸口も回復した。「石見銀山要集」⁶にも「百三十人程在方村々より参候柄山負」とあるごとく、周辺農村より銀山へと労働者の流入も見られるようになった。しかし、天保期になると銀山経営の不振もあって再び人口は減少し、文久に至っては1000人程度にまで落ち込んだ。

なお天保期の戸口の減少は、単なる銀産の低下のみにその原因があるのではなく、天保の飢饉や疫病の流行なども大きく関わっているが、とりわけ天保9年に襲った疫病は銀山町に大きな影響を及ぼしたようである。

私支配石州銀山町山師下財山稼仕候モノ共、年々不同者御座候得共、去酉年迄八凡二百五六十人茂有之、其外吹方職モノ、猶隣村より山稼吹方等二雇入候モノ共数多御座候処去酉以来疫病流行仕、当度二至り別而烈敷相成、銀山町之モノ共一統相煩候二付、山稼吹方共必至ト差支候程之儀二付、薬用其外共種々手当等世話仕候得共、当正月より閏四月中迄男女合百十人死失仕⁷

この年銀山およびその近辺で疫病が流行し、銀山町では5ヶ月間で男女110人もの死者が出たことがわかる。疫病による人口減は、もとより労働人口の減少を意味するものであるから、鉱山経営にも深刻な影響を及ぼしたことはいうまでもない。

このように銀山町の戸口は、概ね鉱山経営の動向と密接に関係するものといえるが、鉱山経営では前述の貨幣改鑄、また人口では疫病の流行のような問題もあるため、その相関を単純化して理解することは必ずしも妥当ではないであろう。

第3項 鉱山労働者の移動

銀山町における人口の増減は、基本的には出生・死亡・結婚・離婚などに規定されることはいうまでもないが、これに加えて労働力の移動という側面も少なからずある。そこで以下にこの問題について見ることにする。

文化期には銀産の増長に伴って、農村から柄山負などの非技術労働者の流入があったことは先に述べたが、これとは別に他鉱山からの技術労働者の流入も幾分かあったようである。

江戸時代の鉱山労働者には、地付きの鉱夫以外に、「渡り」と呼ばれる流動的な労働者もいた。例えば、秋田大葛金山では、嘉永6年における労働人口180人のうち約1割が渡りの労働者で占められていたという⁸。石見銀山においてもその実態は必ずしも明らかではないが、次の史料から労働力としての渡りの存在が指摘される。

差上申一札之事⁹

生国豫州西上船木村

勘次

当子

右之者渡り山掘子二御座候而、去ル戌年当銀山江罷越申候、此儀光田宗五郎彼地江参候節、知者二相成慥成もの二付宗五郎を慕ひ罷越、夫より同人口入二而兵蔵方江入込是迄敷内働仕、同人家内二相成居申候、然ル所此度りよ方江贅養子二仕度兵蔵・豊吉より段々願申上候、依之右勘次身上之儀双方五人組御糺被遊候二付、委細申上候、私共年来見聞候所至実正之もの二御座候間、何卒兩人願通り御聞済被下候様奉願上候、万一勘次不埒之儀出来仕候ハゞ、本人親類八不及申五人組二至迄何分之御咎被仰付候とも一言申分無御座候、依之御受証文差上申所、仍而如件

文化三年寅二月

	勘次	印
勘次当り親	中村兵蔵	印
同人受相人並りよ親類	豊吉	印
兵蔵五人組	清九郎	印
同 断	庄次	印
同 断	嘉平	印
りよ五人組	鶴松	印
同 段	儀七	印
同 断	彦吉	印

御役人様

この史料は、「渡り堀子」である伊予国西上船木村の勘次が、知人である銀山住人の光田宗五郎を頼り銀山で山稼をしていたところ、この度りよの婿養子として銀山の住人になることを町役人に届けた際の請状である。これによって銀山でもまた「渡り堀子」の流入が

あったことが知られる。なお光田と勘次は、光田が伊予へ行ったときに知り合ったもので、あるいは光田も「渡り」として一時期他の鉱山で働いていたものかもしれない。

こうした渡り鉱夫の流入がある一方で、銀山からの流出もあった。かかる労働力の流出は特に産銀の減少が著しい幕末に見られるが、その行き先としては近隣の佐津目銅山や笹ヶ谷銅山などが多かったようである。

乍恐以書付歎願奉申上候¹⁰

- 一 松本豊太郎悻平太郎義、山方手子二差向罷在候所、近来病氣二付相断、当二月中不沙汰二家出いたし雲州佐津目銅山江罷越候風聞達御聴、今般被召出御察当厚御理解被仰渡、御吟味中町預ヶ被仰付奉恐入相慎罷在候、是迄心得違不出精仕候段、先非後悔仕御理解之程難有奉承伏候、向後豊太郎親子之もの共心底急度相改山稼出精為仕可申候間、何卒格別之御慈悲を以御吟味御赦免被仰付被下置候様奉願上候
- 一 下財政太義当二月中不沙汰家出いたし候二付行衛相尋候得共相知不申、然ル所笹ヶ谷銅山江日雇稼越候段風聞達御聴、同人引戻方町役人江被仰付早速親類之もの共彼地江越連帰御届申上候所、今般被召出被仰聞候八、当御宝山稼人者自己勝手二他山江罷越相对雇稼不相成旨兼而被仰渡も御座候処、政太義他山稼仕候段不埒二付、今般被召出御吟味中手鎖町預ヶ被仰付奉恐入、先非後悔相慎罷在候、此上御吟味奉請候而者重々恐入身上立行不申奉存候、向後心底急度相改山稼出精為仕可申候間、何卒格別之御慈悲を以御吟味御赦免被仰付被下置候八、広太之御仁恵難有奉存候間、恐をも不顧共一同奉願上候、以上

(慶応2年)

寅 四月

政太親類

庄三郎

同人五人組惣代 禎次郎

豊太郎親類 横田源次

同人五人組惣代 兵三郎

銀山方御役所

これによると、松本豊太郎の悻平太郎と下財である政太の両名は、町役人等に沙汰せず出雲の佐津目銅山と石見西部の笹ヶ谷銅山へそれぞれ山稼のため赴いていることがわかる。こうした行為が違法であることは、彼らに対する処分からも窺われる。しかも「相对雇稼不相成旨兼而被仰渡も御座候」とあるように、銀山住人の他鉱山への出職は何度か代官所でも厳しく申し渡している。そもそもそうした通達があるということは、逆にこの時期他鉱山への出職が多かったことを意味するものであり、幕末期における人口減の背景にはこのような他鉱山への流出があったことも十分に考えられるであろう。

第2節 銀山町の社会構成とその特徴

第1項 銀山町の人別と身分

銀山町の人別は第6表が示すように、およそ山師・下財と明り人とに大別できる。山師・下財はともに山方稼の者たちであるが、特に山師は「銀山師」とも称され、苗字帯刀など

の身分的な特権が与えられた。

第6表: 銀山町年々家数人別控帳

年代	家 数									人 別 数									
	総 数	山師・ 下財	明り 人	寺	社 家	山 伏	庵 室	医 師	座 頭	総 数	男	女	出 家	社 人	山 伏	尼	医 師	こ せ	座 頭
文化12年	465	262	160	26	3	4	10			1722	894	828	43	5	7	4	3	1	
13年	464	264	157	26	3	4	10			1696	881	815	43	5	7	4	3	1	
14年	462	264	155	26	3	4	10			1662	850	812	43	5	7	3	3	1	
15年	460	264	153	26	3	4	10			1650	850	800	43	4	7	4	3		
文政2年	467	255	168	26	3	3	10	2		1634	853	781	37	4	4	4	3		
3年	486	247	194	26	3	4	10	2		1671	862	809	41	4	5	4	3		
4年	491	235	211	26	3	4	10	2		1705	874	831	38	4	6	3	3		
5年	496	225	226	26	3	4	10	2		1690	876	814	40	4	5	3	2		
6年	496	238	213	26	3	4	10	2		1693	861	832	38	4	5	4	2		
7年	496	230	219	26	3	4	11	2	1	1674	874	800	39	4	4	4	2		1
8年	488	246	195	26	3	4	11	2	1	1629	840	789	36	4	4	4	2		1
9年	489	242	200	26	3	4	11	2	1	1612	835	777	41	4	4	4	2		1
10年	474	235	192	26	3	4	11	2	1	1538	779	759	36	4	4	4	2		1
11年	469	222	201	26	3	3	11	2	1	1515	773	742	39	5	4	4	2		1
12年	478	223	209	26	3	3	11	2	1	1470	751	719	36	5	4	4	2		1
13年	463	243	174	26	3	3	11	2	1	1390	708	682	40	5	4	4	3		1
天保2年	457	209	202	26	3	3	11	2	1	1373	699	673	42	5	3	4	2		1

出典: 高橋家文書

山師は新たに間歩を開発し、一定の運上銀を代官所に上納した者が山組頭などの取次で取り立てられたが、例えば万延元年の田儀屋旦二の場合では以下の通りである。

乍恐以書付奉申上候¹¹

栃畑谷

一新口 稼人

熊谷三次郎

田儀屋旦二

右者栃畑谷新口去ル午年十月より昼夜差はまり相稼申候所、早速鍵二切当月々御運上ヲ差上、此節二至候而茂無懈怠稼出情仕出灰吹相応御座候、間歩名真名鶴山与相唱、稼人旦二儀如先規新山師申付候様仕度奉存候、此段何卒御聞済可被下置候様奉願上候、以上

(万延元年)

申 五月

山組頭見習

橋本武一郎

山組頭

上野清十郎

同

高橋富三郎

同

橋本忠三郎

同

高橋猶之丞

同肝煎

上野藤蔵

銀山方御役所

この史料は、熊谷三次郎と田儀屋旦二の両名が新規に間歩（真名鶴山）を開発し運上銀を上納した功績として、稼人の田儀屋旦二を先例に従って新たに山師に取り立てるよう山組頭から銀山方役所へ出願した時のものである。田儀屋旦二は大森町の商人であり、もう1人の稼人熊谷三次郎とは親戚関係にある。この場合山師である熊谷氏と相名目とすることで間歩の開発が許可され、この度山師に取り立てられたのである。

山師に取り立てられると、山主として自らが開発した間歩の権利（採掘権）を認められるほか、苗字や旅帯刀などの身分的な特権が与えられた。江戸時代にはこれらの権利と特権が株化し、その株の移動を通じて山師の交替が行われた。

御請申一札之事

熊谷三左衛門儀代々銀山師二相違無之、栃畑谷熊谷山、清水谷熊谷横相右式口從來所持いたし居候処、分家三次郎儀、熊谷先靈之跡致相統候二付、親類熟談二およひ今般同人江銀山師株譲渡以来苗字相名乗候様致度段右兩人より相願出銀山御役向二おいて差支筋無之二付銀山方御役所江御伺之上御聞濟相成難有奉存候、然ル上者右間歩式口共三次郎讓請候得者向後稼方いたし出灰吹銀相進ミ候様出精可致、猶又外銀山同列之儀二候得者諸事御作法相守候儀者勿論、山内一同江対し候とも疎意無之様可致段御申渡委細承知仕候、若前文相背候廉有之候ハ、如何様二も御取計可被成候、依而御請申処、如件

安政五年六月

熊谷三左衛門（印）

熊谷三次郎（印）

山組頭御衆中

これは前述の熊谷三次郎が、本家の熊谷三左衛門から山師株の譲渡を受けたときの請状である。熊谷三左衛門は大森町に居住する商人で、御用掛屋や御用達などを勤めたが、この請状から山師として栃畑谷の熊谷山、清水谷の熊谷横相の2口を所有していたことがわかる。三左衛門から山師株を譲渡された三次郎は、これ以後2つの間歩を所有し、「熊谷」の苗字を名乗ることとなる。

次ぎに下財は山師が身分上の特権を有するのに対し、かかる特権を有さない山稼人である。下財については「石州銀山記録」¹²に次のように説明している。

—^{げざい}下財 前同断入手等も遣ひ候事也

是者山師二相断候通別二相替儀無御座候

山師下財と名目者相替候へ共、稼方杯之儀相替儀曾而無御座候へ共、山師八苗字旅

帯刀も仕候二付而者都合而丁方山方へ懸り候役儀も山師の内より撰出申付候、其外
年之買請米等之儀も相願候へ共、其年々精不精二寄甲乙者御座候へ共、五石三石宛
も割賦申付貸渡申候、且式番之ヶ條二御座候、切延手当之儀、下財斗二而者難申付
二付、山師之内名前差加申候

これによると、山師と下財では名目上は異なるが、実際の稼方においては何ら代わりがな
かったことがわかる。ただ、苗字帯刀や町方・山方の役人の任命、また代官所からの切延
手当などは、下財には認められていなかったようである。

一方、明り人とは「明り」が山言葉では坑外のことを意味するから、この場合採鉱労働
以外の者といえる。明り人には山方の日雇いもあり、これらは鏈拵人・淘物師・唐臼踏・
吹大工・灰吹師・様吹師などで、それ以外では商人・大工・木挽きなどであった。

前掲第6表によると、山師・下財と明り人の家数の割合を見ると、前者が概ね50%前
後、後者が40%前後と若干山師・下財の家数が多かったことが知られるが、ただしこの
史料では個別の実態についてはわからない。そこで慶応3年「田畑持高家数人別書上帳」
¹³をもとに改めてこの点を考察することにしよう。

第2項 銀山町の住民構成と職業

慶応3年「田畑持高家数人別書上帳」は、銀山町住人の家
族構成や職業そして田畑の所有状況を個別の人別ごとに書き
上げたものである。これを整理したものが第7表であるが、
当該年の銀山町の家数は312戸、人数は807人である¹⁴。

先ず家族の規模について見ることにしよう。第8表は1戸
当たりの家族数を整理したものである。これによると、銀山
町では1人暮らしの戸数が94戸で全体の3割を占めている
ことがわかる。次いで2人暮らしが87戸約27%で、この
2つで実に戸数全体の6割近くに及んでいる。

なお前掲第4表によると、銀山町の家族は時代をおって零細
化していることがわかる。例えば延宝・元禄の両年では1戸当
たりの人数が5人前後であるのに対し、元文期以降では3.5人
以下となっており、文久に至っては2.7人に減少している。さ
らに慶応では2.5人にまで減少している。これを職業別で見た
のが、第9表である。町役人など比較的富裕層の家の場合家族
数も多いが、商人（行商）や日雇稼など経済的に不安定な者た
ちではやはり1人暮らしが多い。おそらく所得に関係するのであろう。

次ぎに銀山町における職業とその構成について見ることにしよう。第10表は職業別の
戸数状況を整理したものである。この頃の銀山町には鉱山労働者のほかに、商人・大工・
鋳物師・桶屋などが職業として存在していたことがわかる。職業別に見ると、当然ながら
山方稼が27%と最も多く、次いで日雇の14%、吹方日雇の10%となる。したがって、

第8表：家内人別数の比較

家内数	軒数	割合
1	94	30.23%
2	87	27.97%
3	56	18.01%
4	35	11.25%
5	27	8.68%
6	9	2.89%
7	0	0.00%
8	2	0.64%
9	0	0.00%
10	1	0.32%
合計	311	

史料では戸数 312 とあるも実
際には 311 戸

直接鉱山労働に従事する家は40%弱である。ただし、採鉱道具を生産する鍛冶屋など関連業者を含めると、実際にはかなりの部分で鉱山に依存したのではあるまいか。なお未記載についてはほとんどが女性で、これらの者たちがどのような仕事で生計を立てていたかは不明である。石見銀山絵巻などでは、選鉱作業に女性の姿が見えるので、何らかの形で鉱山労働に関わっていたものと思われるが、これについては今後の課題である。

第9表：職業別の1戸当たりの家族数

商人			大工職			百姓・獵師			山方稼		
家内数	戸数	割合	家内数	戸数	割合	家内数	戸数	割合	家内数	戸数	割合
1	4	40%	1	1	10%	1	1	10%	1	15	17%
2	3	30%	2	2	20%	2	2	20%	2	31	36%
3	3	30%	3	3	30%	3	3	30%	3	21	24%
4			4	2	20%	4	2	20%	4	10	12%
5			5	1	10%	5	1	10%	5	6	7%
6			6	1	10%	6	1	10%	6	3	3%
7			7			7			7		
8			8			8			8		
9			9			9			9		
10			10			10			10		

吹方日雇			日雇稼			役附		
家内数	戸数	割合	家内数	戸数	割合	家内数	戸数	割合
1	3	10%	1	17	39%	1	1	6%
2	14	45%	2	10	23%	2	2	11%
3	5	16%	3	9	20%	3	5	28%
4	4	13%	4	3	7%	4	5	28%
5	4	13%	5	4	9%	5	3	17%
6	1	3%	6			6	1	6%
7			7			7		
8			8	1	2%	8	1	6%
9			9			9		
10			10			10		

第10表：職業別戸数

職業名	戸数	割合
鑄掛職	1	0.32%
医師	1	0.32%
桶屋職	1	0.32%
鍛冶職	5	1.61%
木挽職	2	0.64%
左官職	1	0.32%
商人	10	3.22%
大工職	10	3.22%
農間獵師・百姓	8	2.57%
銀吹職	2	0.64%
山方稼	86	27.65%
吹方稼	3	0.96%
吹方日雇稼	31	9.97%
石工職	2	0.64%
日雇稼	44	14.15%
役附	18	5.79%
未記載	86	27.65%

ところで、今ひとつ重要な問題として山師の問題がある。この「人別書上帳」では苗字を持つ家として戸数の約2割、都合68戸があったことがわかる。つまりこの68戸の者が山師という身分の者たちである。しかし、その実態を見ると、山方稼は多いもののなかには小割・樋高両氏のような吹屋の経営者であったり、吹方日雇や商人であったりするものも見受けられる。また、山方稼であっても自らが鉱山経営者となり、銀堀などの労働者を雇用して稼行するといったものではなく、「是者身元小身之者二御座候得者、往古之山師と八違ひ自力長寸法切届事も難相成候故、御直稼所へ雇候」¹⁵とあるように、実際には代官所が直営する間歩（御直山）に銀堀として雇用される者もいた。したがって、一般に山師は鉱山経営者として説明される場合が多いが、この例に示すように実際には多様でその意味から言えば、山師という言葉はやはり身分上の呼称といってよいであろう。

こうした山師身分の者たちのなかには、周辺の農村に田畑を所有するものもいた。第11表は銀山住人における他村の田畑所有状況を整理したものである¹⁶。田畑は概ね銀山の隣村に集中している。持高では高橋氏が32石余と最も多く、上野氏の20石、橋本氏の14石と続く。田畑の所有高はそれほど多くはないが、これらを小作に貸し与えその小作料を収入とした。

おわりに

これまで見てきたように、銀山町における戸口の推移は、基本的には鉱山経営の動向と密接な関係があることが改めて指摘された。無論すべての場合がこのことに該当するものではなく、実際には物価高騰などの経済事情、また飢饉や疫病なども戸口を左右する原因として求められる。その意味において多角的な視野に立った分析が必要といえるであろう。

また、銀山町にあっては鉱山経営の不振を背景として、家族の規模も次第に零細化してきた。特に幕末に至っては1乃至2人暮らしの家が多く、鉱山町としては極めて厳しい事態であったことが察せられる。

なお、従来山師を鉱山経営者として説明してきたが、本論で明らかにしたように実際には商人であったり、また吹屋の経営者であったりと実に多様な様相であり、鉱山経営者という言葉は幕末にあってはほとんど縁遠い勘がある。むしろ山師とは本論で指摘したように、身分的な呼称を意味する言葉として理解すべきであろう。

註及び引用史料

-
- ¹ 荻慎一郎『近世鉱山社会史の研究』思閣出版 1996年
 - ² 三井高維編述『新稿両替年代記關鍵・考証篇』柏書房 1971年
 - ³ 『米価調節史の研究 本庄栄治郎著作集』清文堂 1972年、 294頁
 - ⁴ 「申渡ス覚」『銀山覚書』龍善徳氏所蔵文書
 - ⁵ 「銀山救米覚」『銀山覚書』龍善徳氏所蔵文書
 - ⁶ 『新修島根県史 史料篇3』
 - ⁷ 「岩田鋤三郎殿御支配中諸伺並書上類写」野沢家文書（島根県立図書館謄写本）
 - ⁸ 荻慎一郎「近世後期における金山の生産工程と住民構成」『近世鉱山社会史の研究』思閣出版 1996年
 - ⁹ 上野武三家文書
 - ¹⁰ 「町方御用留」高橋家文書
 - ¹¹ 上野家文書
 - ¹² 日本鉱業史料集刊行委員会篇『日本鉱業資料集近世上篇』(白亜書房 1984年
 - ¹³ 高橋家文書
 - ¹⁴ 史料上の人数と計算上のそれとが異なるため、ここでは実際の数尊重した。なお史料上の人数は801人である。
 - ¹⁵ 前掲註9、「石州銀山記録」(日本鉱業史料集刊行委員会篇『日本鉱業資料集近世上篇』)白亜書房 1984年
 - ¹⁶ 慶応3年「田畑持高家数人別書上帳」に記載される田畑持高と、本史料記載のそれとで齟齬がある。史料の性格の違いからそのような齟齬が生じたものと思われるが、ここでは田畑の反別よりどの村に分布しているかに注目することにした。

第7表：銀山町の人別と職業

	役柄	職業	筆頭者	職業	職持者	職業	職持者	家内	内訳				田畑持高(モ)	
									男	女	男幼少	女幼少	田	畑
1		百姓	元一					3		2				0.7
2		農間獵師稼	辰之助	農間獵師稼	清太			5	6	1	1	1	0.677	0.854
3		山方稼	三宅為吉	山方稼	秀吉			4		1		1	1.95	0.4
4		吹方稼	片山台三郎					1					4	0.6
5		吹方稼	高田安太郎					5		2	1	1	6.47	0.24
6		銀吹職	矢田沢吉					5		3		1	5.138	2.287
7		山方稼	綱一郎					1					6.16	3.122
8		商人	広吉					1					6.6628	6.54
9	年寄・山組頭見習		橋本武一郎					8		3	1	3	9.886	4.561
10	年寄・山組頭見習・定使兼		上野弥五郎					4		2	1		6.6628	6.504
11	年寄・山組頭		高橋富三郎					4		1	1	1	9.886	4.561
12	町組頭	銀吹職	小割市之助					3		1				
13	町組頭・山附		高橋好太郎					3		2				
14	山附		光田文太郎	山方稼	丹兵衛(父)			3		1				
15	山附		小川兵一					4		1	2			
16	山附		龜山栄蔵					2				1		
17	町組頭・山附		手嶋佐太郎					4		3				
18	町組頭・山附		山崎徳十郎					4		1	1	1		
19	山附		西村萬吉					3		2				
20	町組頭		三宅丈一郎					3		2				
21	年寄・山組頭・定使兼		上野清十郎					5		1		1		
22	町組頭	(銀吹職)	樋高峰松					6		4				
23	山附		落合房太					2		1				
24	町組頭・山附		松本市之丞	山方稼	未松(幼少)			5		2				
25	町組頭・山附		布川管左衛門	山方稼	仙五(幼少)			5		1		2		
26	山附		水田藤一					1						
27		石工職	次平					3		2				
28		吹方日雇稼	政太					2				1		
29		吹方日雇稼	源助					2		1				
30		吹方日雇稼	弥三郎					2		1				
31		山方稼	味塩堅次					1						
32		日雇稼	栄次					1						
33		山方稼	萬次	山方稼	伊太郎(弟)			6		1	1	1		
34		日雇稼	為吉					2			1			
35		山方稼	林為三郎					2		1				
36		山方稼	竹下次郎左衛門					2		1				
37		吹方日雇稼	宗一					5		1	2	1		
38			源三郎	山方稼	貞太(幼少弟)			3		1				
39			さき					1						
40			福岡市太郎					2			1			
41		吹方日雇稼	芳太郎	山方稼	善太			2						
42		日雇稼	祐市	山方稼	鉄太郎			5		1	2			
43			りえ					2		1				
44			のよ					3		2				
45		山方稼	萬三郎					2		1				
46		吹方日雇稼	三宅藤十郎	吹方日雇稼	平一			5		2	1			
47		医師	文英					5		1	2	1		
48		山方稼	勘次郎					4		2		1		
49		山方稼	松本豊太					3		1				
50		山方稼	長次郎	山方稼	祐次	山方稼	吉太	3						
51		山方稼	久次郎					2		1				
52		山方稼	元田虎太					3		1	1			
53		山方稼	山代作次郎					1						
54			竹下定一	山方稼	佐蔵			4		1		1		
55			みお					2				1		
56			たい					1						
57			りき(善左衛門娘)					1						
58		山方稼	長谷民五郎					2						
59		日雇	近平	山方稼	佐太郎			3		1				
60		吹方日雇稼	松本彦三郎					2		1		1		
61		山方稼	常作(幼少)					1						
62			でん					2				1		
63			まさ					2				1		
64		商人	樋高卯一					3		2				
65			基四郎	山方稼	初吉			5		3				
66			りせ					1						
67			ちか					1						
68			むね					1						
69		百姓	周兵衛					4	5	3				
70		吹方稼	基四郎	山方稼	初吉			5		3				
71		日雇	庄三					3		1		1		
72		山方稼	植次郎					4		2	1			
73			しま					1						
74		山方稼	影山廉太	山方稼	猶太郎	山方稼	種蔵	5		1				
75		吹方日雇稼	東四郎					1						
76			そも					1						
77		商人	清水仙吉					2		1				
78		山方稼	政太					2		1				
79			きく					1						
80		大工職	常吉					1						
81		商人	瀬本長市					3		2				
82		商人	松原清市											
83		大工職	喜助					2		1				
84		山方稼	横田源次郎	山方稼	竹市(弟)			3		1				
85		山方稼	石橋伊作					3		1	1			
86		山方稼	三宅助之丈					2		1				
87		日雇	惣吉					3		1				
88			田中浅一					2		1				
89		山方稼	音市					5		1				
90		吹方日雇稼	銀吉					4		2				
91		商人	松原為市					1						
92		山方稼	栄太					2		1				
93			ちえ					1						
94			かめ					1						
95		山方稼	藤吉					1						
96		吹方日雇稼	嘉助					2						
97		吹方日雇稼	森田幾太					1						
98			きし(幼少)					1						
99		山方稼	松原藤太					2		1				
100		吹方日雇稼	広田虎蔵					5		2	2			
101		商人	矢野格蔵					2		1				
102		山方稼	柿田浅太					2				1		
103		山方稼	平太郎					3		2				
104		吹方日雇稼	小市					1						
105		吹方日雇稼	林平					2		1				
106		吹方日雇稼	喜太郎					2		1				

107		吹方日雇稼	利平					2		1			
108			うめ					1					
109		百姓	惣四郎					6		2		2	
110		吹方日雇稼	吉太					4		3			
111		山方稼	柳右衛門					2		1			
112			きし					1					
113		山方稼	林蔵					2			1		
114		山方稼	幸太郎					1					
115			とり					2		1			
116		山方稼	市太郎	山方稼	豊治			4		1			
117		山方稼	安太					3		2			
118			つゆ					1					
119		山方稼	仙之助（幼少）					1					
120		山方稼	寅市					2		1			
121		山方稼	仲太郎					3				1	
122		山方稼	茂助					1					
123			たよ					3		2			
124			すな	山方稼	太三郎（幼少）			2		1			
125		山方稼	増太郎					3		2			
126			この					1					
127		山方稼	兵市	山方稼	五作（幼少弟）			3				1	
128			平田重吉	山方稼	茂作（弟）			3				1	
129			きせ					2		1			
130		山方稼	作太郎					2			1		
131		商人	房兵衛					3				2	
132			りゆ（幼少）					1					
133			はる					2		1			
134			よし					1					
135			くに					3			2		
136			み与					1					
137			ぜん					1					
138			とな	山方稼	忠太（幼少）			2		1			
139		山方稼	卯太郎					2		1			
140		山方稼	吉原富太					3		2			
141		山方稼	兵三郎					1					
142			たみ					2		1			
143		吹方日雇稼	清蔵					6		2	1	1	
144			つね					2		1			
145			ちよ					2		1			
146		商人	加藤竹次					2		1			
147		商人	三宅松蔵					1					
148		吹方日雇稼	好太郎					3		1		1	
149		日雇	為次					1					
150			そよ					1					
151		山方稼	竹下忠作					1					
152		山方稼	中田久太郎	山方稼	兵市（幼少）			3		1			
153		山方稼	瀧太郎					2		1			
154		山方稼	宗一		亀太			2					
155		山方稼	原田繁市					4		2	1		
156		山方稼	佐藤作吉					5		1	2	1	
157		日雇	力蔵					1					
158			しゆん					1					
159		山方稼	栄次					2		1			
160		日雇	庄吉					3		2			
161		日雇	市太郎					1					
162			たね					1					
163		日雇	音市					2		1			
164			とよ					2		1			
165		日雇	栄四郎					1					
166		日雇	常作					1					
167		日雇	要吉					1					
168		日雇	未作					1					
169		日雇	友蔵					3		1	1		
170		吹方日雇稼	熊次					3				1	
171		日雇	伊吉					3		1	1		
172		農閑兼師・百姓	豊平					2		1			
173		日雇	利助					4		3			
174		大工職	吉助	大工職	覚太郎（倅）	大工職	徳太郎（倅）	4	5	1			
175			とめ					4		3			
176			とま					1					
177		山方稼	好松					1					
178		吹方日雇稼	浅次					4		2		1	
179		大工職	万次	大工職	浅太（倅）			4		1		1	
180		山方稼	安吉（幼少）					1					
181			とみ					1					
182		吹方日雇稼	富太					2		1			
183			さき					1					
184		吹方日雇稼	源太郎					3		1		1	
185		大工職	仙平					6		3	1		
186		山方稼	孫右衛門	大工職	小平（倅）			3		1			
187		山方稼	兼谷善兵衛					2			1		
188		吹方日雇稼	庄吉					4		3			
189		日雇	辰次					4		1		2	
190		木挽職	文兵衛					4		1	1		
191		山方稼	米市					1					
192		山方稼	辰太郎					4		3			
193		日雇	作市					1					
194			せん					4		3			
195		百姓	忠七					3		1			
196		吹方日雇稼	常太					3		3			
197		日雇	伝次郎					2				1	
198			つね					1					
199		大工職	松助					3		1			
200		日雇	利蔵					1					
201		日雇	彦吉					1					
202			直太郎					1					
203		日雇	頼次郎					1					
204			しを					6	6		4	1	

[illegible]

第11表：他村の田畑所有状況

ID	名前	田高	畑高	合計	内 訳					
1	高橋富三郎	26.783	5.916	32.699	小松地村(6.135)	戸蔵村(9.209)	尾波組(12.595)	大国村(3.224)	大屋村(1.483)	行恒村(0.264)
2	橋本武一郎	9.895	4.611	14.506	三久須村(9.88)	白坏村(4.626)				
3	上野弥五郎	11.949	8.451	20.390	三久須村(13.07)	祖式村(4.104)	佐摩村下組(3.326)			
4	矢田沢吉	4.538	5.238	9.776	三久須村(7.025)	佐摩村上組(2.751)				
5	片山台三郎	4.000	0.600	4.600	三久須村(4.6)					
6	矢田宗市		1.475	1.475	佐摩村上組					
7	まさ		1.421	1.421	佐摩村上組					
8	林為三郎		1.617	1.617	佐摩村上組					
9	高田安太郎	6.742	0.240	6.982	荻原村(5.542)	戸蔵村(1.44)				
10	元市		0.700	0.700	佐摩村上組					
11	広吉	9.576	4.176	13.752	大田南村(6.579)	佐摩村上組(4.769)	祖式村(2.404)			
12	綱一郎	6.160	3.122	9.282	大国村					
13	三宅為吉	1.950	0.400	2.350	大国村					
14	辰之助	6.780	0.854	1.532	祖式村					
15	妙像寺	8.628		8.628	忍原村(8.428)	大国村(0.2)				
16	西向寺	2.900	2.651	5.551	三久須村					
17	本経寺	9.559	5.590	15.149	大国村上ヶ組					
18	西福寺	1.159	0.405	1.564	祖式村					
19	妙正寺	0.500		0.500	小松地村					
20	龍昌寺	15.492		15.492	仁万村(9.358)	大国村(6.1)				
21	安養寺	0.576	1.778	2.354	祖式村(0.693)	尾波組(1.651)				
22	安立寺	9.289	2.731	12.020	先市原村					
23	長福寺	0.408	0.200	0.608	野井村(0.4)	東用田村(0.208)				

出典：慶応3年「他村二而小前持高書上帳」高橋家文書